河内名所圖會

五

ル 4
3540
5

3540
5

らんがき
法貴拾

十万弥

河内名所圖會卷之五目錄

大縣郡

亀瀬川 奇石數品
宿奈神社
金山孫神社
地藏堂
氷室旧蹟
寡婦冢
若倭姫神社
大狛神社

高尾山
高安田慶寺
鐸比古神社
金山孫女神社
吏婦冢
瑠璃寺 山井
阪戸原荒陵
常世岐姫神社

天湯川田神社
普光廢寺
茶山
智識寺 清浄泉
大冢
石神社
崩冢

竹原井
大日寺
鷹巣山
松谷光德寺
長冢
若倭彦神社
春日神祠

高安郡

恩智山
高安山

恩智神社 摂社 末社
高安里

恩智左近墓
名産高安木綿

九本櫻
教興寺

昭和十六年一月十一日寄
尼野貴英氏贈

此一冊彫工井上

天照高座神社　白飯滝　八大金剛祠
法蔵寺　佛殿　清涼堂　石佛　銘書　登龍阪　擇部神祠　高安城墟
鬼額　四百殿　千塚　佛麻多度神社　真徳丸古蹟
玉祖神社　未社　梶原割札　本地堂　朝比奈峯　竹之坊　十三佛
業平河内通跡　意の水　笛吹松　夜懸巌
別之水　花岡山　御祖神社　鴨神社
楽音寺　春日戸神社

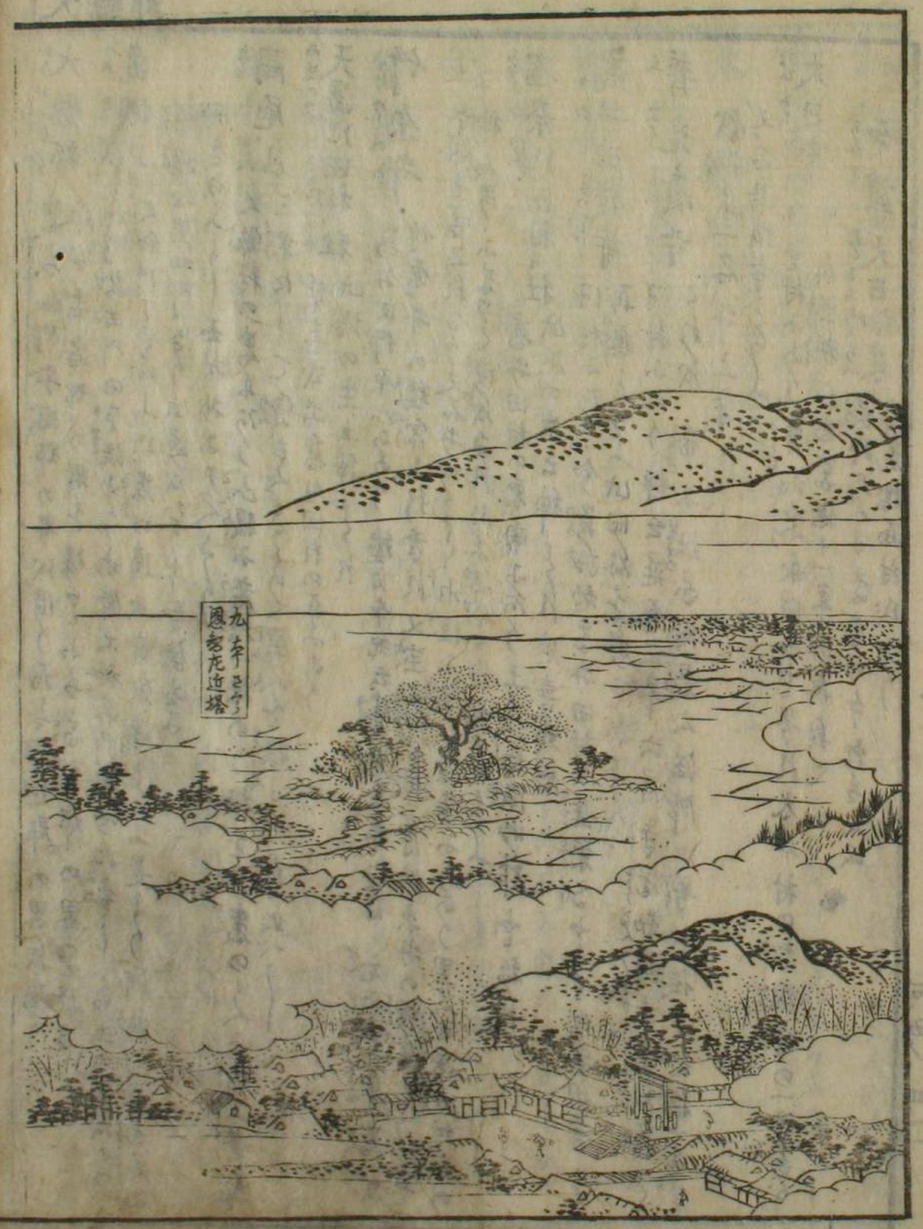
河内郡

伊駒山　御野神社　寺井　津原神社
池島観音　恩知川　往生院　楠正成塔　楠正行墓
梶無神社　櫻井　四條縄手戦場
牧岡神社　本社　未社　若宮　恵津岳　一番岳　見津　白水池　洗濯所　如意ヶ
大塚　大津神社　栗原神社　姥ヶ火の

椋嶺峠　髪切山　本堂　鬼髪田　観音堂　五子塚
長尾瀧　雙竜藏　石碑
千手寺　額田洞　不動寺　龍山公　石碑
草香山　鷲尾山　額田寺
草香江　石切劔箭神社　興法寺
大龍寺　草苅里　日下瀧
富景樓　忠臣日下部使主

恩智社

恩智社
石階
同左近塚
九本櫻
平社より
鳥居まで
五六丁斗


九本櫻
恩智左近塚

大縣郡 東は和列平郡の界限り西は志紀郡の界限り南は安宿郡の界を限る安郡の界を限る

亀瀬川 和列郡田川の下流なり水源は大和名所図会に委しく上の名所図会に載せ滝あり是なり河内の界南花田

稚田里四町なり氏道公むかし聖徳太子

厩戸皇子 太縣村の東にあり山腹に老松一株あり根を巨叢のうへに延へ蓋幕

高尾山 三柔にして愛もべきものあり里人を撰して尋ぬべし

天湯川田神社 延喜式出高井田村の西にあり 氏地の生土神なり

竹原井 高井田竹原山にあり 續日本紀云養老元年二月 元正帝車駕竹原井の頓宮に行幸され又宝亀二年二月竹原井の頓宮に行幸

あらそそこれあり又石井にあり水源深し其傍に石あり里人云稚足姫尊の産湯の井なりと 後に名を改め竹原井と号く

宿奈川田神社 高井田村の東南にあり土人白阪明神と称す 氏地の生土神なり延喜式出

高井田廢寺 旧村にあり今荒田と称す 聚鳥山寺と云旧称を移し伽藍の礎あり

普光慶寺 旧村にあり傳云延暦二年六月寺僧勤韓赤鳥を獲て

これ仏 帝に奏す国是大法師の号仏授を統稲一子水

仏器 一名阪寺

又名鳥阪寺

大日寺 安堂村にあり曹洞宗永照山と号す太平村の智識寺の一院なり

中興 寛保十一年の再興

本尊大日如来 長弐尺六寸 本寺の本尊なり大坂

長弐尺六寸 本寺の本尊なり大坂

金山孫神社 延喜式内古名未詳 谷村の山頂にあり旧称に老松あり八大金剛を祭る社

鐸比古神社 延喜式内高尾山の嶺にあり今比賣毘日浮羽と云倩に

采山 平野村の上方雁多尾畑山の南にあり

鷹巣百首 こ先山の峯とぶ鷹なれまそのの羽うとの屋乃巣をとし 後人詠

鷹巣山 法若村の上方にあり采山と称す 山腹柳樹あり

地蔵堂 亀瀬村にあり里人云婦人乳を病うの或は乳のうれたもの

金山孫女神社 延喜式出雁多尾畑村にあり今山王と称す

智識寺 初先安堂村の平の二村にわたりて仏蹟巍々たり天平勝宝八年二月に建立す今は平村に旧址あり

清浄泉 四時涸れず

松谷光徳寺 雁多尾畑村にあり浄土真宗

本尊阿弥陀佛 立像弐尺 浄蓮貴所の作 秀融法皇の御念持佛 後人

平安仏 平安仏なり

して東慶山照曜峯寺と号す 後堀川院へ奏し堂舎を

の後矢伯都信貴山毘沙門天の霊告仏感して 後堀川院へ奏し堂舎を

再建し勅願所と改む 後京師安居院の聖覚

法師に値く 専修念佛門に入る 遠に親鸞聖人の弟子となる

[illegible]佛念房[illegible]寺念佛門の開祖[illegible]寺[illegible]
[illegible]林堂[illegible]号[illegible]又[illegible]堂[illegible]
[illegible]水[illegible]井[illegible]名泉[illegible]
[illegible]あり古[illegible]の[illegible]寛喜巳丑の年
[illegible]又[illegible]実教[illegible]
村人[illegible]れを[illegible]石[illegible]棒石[illegible]椿石[illegible]空虚石[illegible]
石あり又[illegible]石[illegible]長[illegible]
わ[illegible]の[illegible]泉直下[illegible]流[illegible]あり夏い暑[illegible]

名地形

氷室舊蹟 雁多尾畑村[illegible]あり氷室の始[illegible]仁德天皇の御宇[illegible]
[illegible]波名所圖會[illegible]見[illegible]

夫婦塚 同村[illegible]あり由緣伝[illegible]に 大塚 長塚 寡婦塚 [illegible]あり

瑠璃光寺 山井村[illegible]あり醫王山[illegible]号に開基[illegible]行基大士[illegible]寺[illegible]
茅所佛[illegible]沂基の[illegible]長六尺[illegible]禪僧寺藏[illegible]
山井 堂の傍[illegible]あり傳冷甘味[illegible]釋迦[illegible]井[illegible]
眼疾の[illegible]の灌[illegible]若浦[illegible]あり

石神社 延喜式出太平寺村[illegible]あり今熊野と稱[illegible]三代實録云
貞觀九年二月頒官社[illegible]地の生土神[illegible]

若倭麦神社 鎏延喜式出平野村[illegible]あり今權現八幡二座[illegible]稱[illegible]
[illegible]地の生土神[illegible]三代實録云貞觀元年八月授従五位下

若倭姫神社 鎏延喜式出平野の屬村[illegible]あり今妻日八幡[illegible]稱[illegible]
[illegible]地の生土神[illegible]三代實録云貞觀元年八月授従五位下

阪戸原荒陵 平野村[illegible]あり里人云淳寧天皇陵[illegible]稱[illegible]陵上[illegible]大木
の古松[illegible]陵[illegible]古[illegible]那[illegible]浦村白髮[illegible]
若[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ改[illegible]夢の
地[illegible]いまゞ分明形[illegible]に

崩家 日村[illegible]あり由緣伝[illegible]
窟中[illegible]廣サ丈餘

春日神祠 大縣村[illegible]あり大縣[illegible]例祭六月廿六日
生土神[illegible]

大狛神社 延喜式出本堂村[illegible]あり今山王[illegible]稱[illegible]
[illegible]地の生土神[illegible]

常世岐姫神社 延喜式出神宮寺村[illegible]あり今八王子[illegible]稱[illegible]
三代實録云貞觀九年二月頒官社[illegible]地の生土神[illegible]

高安郡 東ハ和州平群郡の界紙限[illegible]西ハ若江郡の界を限り
南ハ大縣郡の界を限り北ハ河内郡の界紙限る

恩智山 恩智村の東北[illegible]

恩智神社二座 延喜式曰名神大月次相嘗 新嘗 恩智 [illegible]あり
恩智 神宮寺村[illegible]の生土神[illegible] 例祭六月廿七日
十一月卯辰の日文德實録云嘉祥三年[illegible]十月恩智大御食津
[illegible]食津姫命授正三位勲六等[illegible]三代實録云元觀元年正月
並[illegible]授従

攝社 [illegible]日明神[illegible]

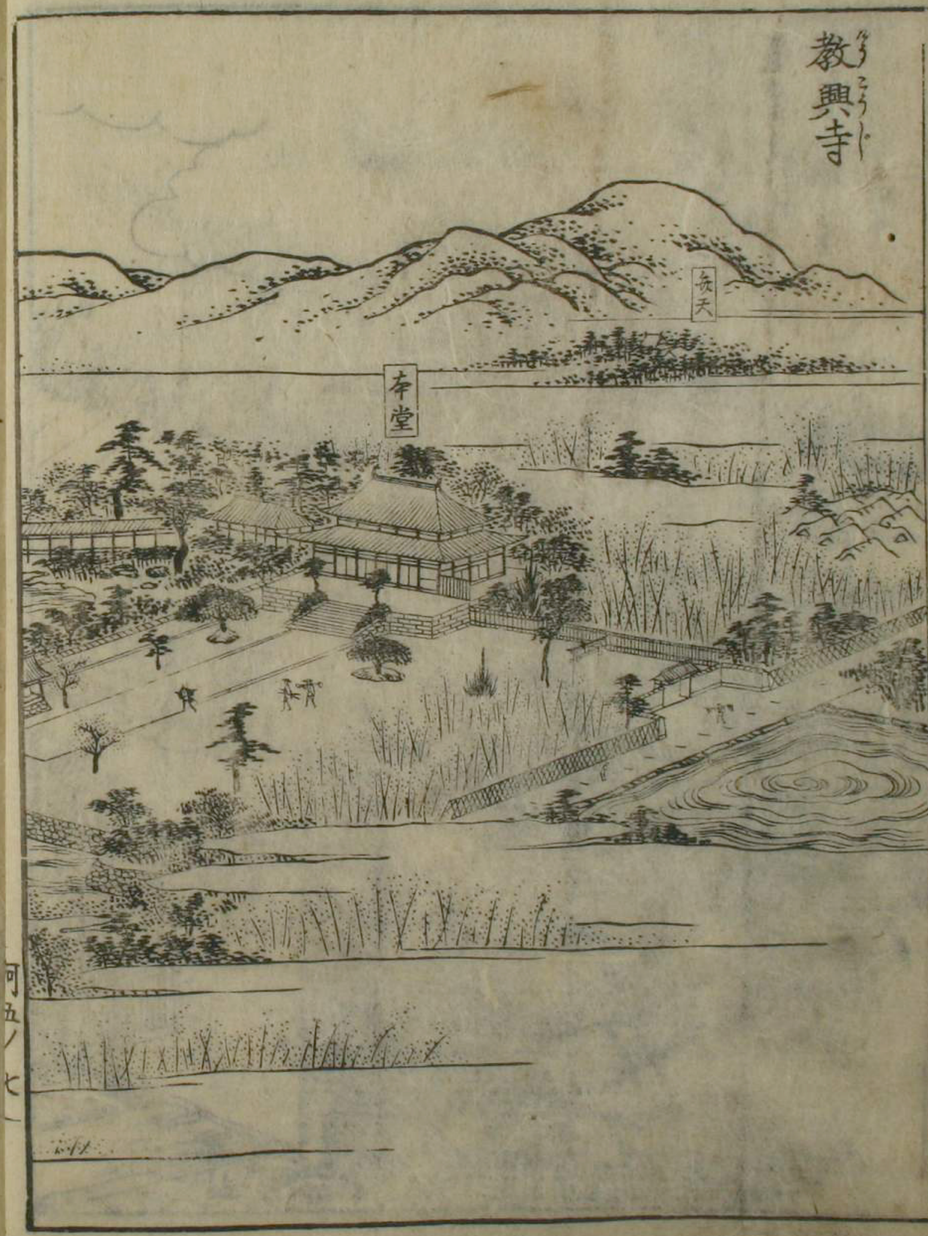
末社 神明 西宮 王祖 住吉 熊野 吉野 八幡宮 山奥六七町[illegible]あり

尤近將監恩智滿一墓 恩智[illegible]
勤労[illegible]志操[illegible]
見附石[illegible]還の傳[illegible]社の入口[illegible]あり[illegible]古[illegible]大樹[illegible]根際[illegible]九本[illegible]
九本櫻 恩智家の側[illegible]分る今株枯[illegible]寺雅[illegible]宛も古梅の[illegible]
又六十年[illegible]れを枯[illegible]
老樹[illegible]

安の里紙
氣のあり
むをめ織しを
班竹

國中の民婦いとく
勢て紅絲織棉布を
織て恒の產とす
他邦ふ勝れて
剛地へ

高安の
里は
方丈
表門


教興寺
奉堂

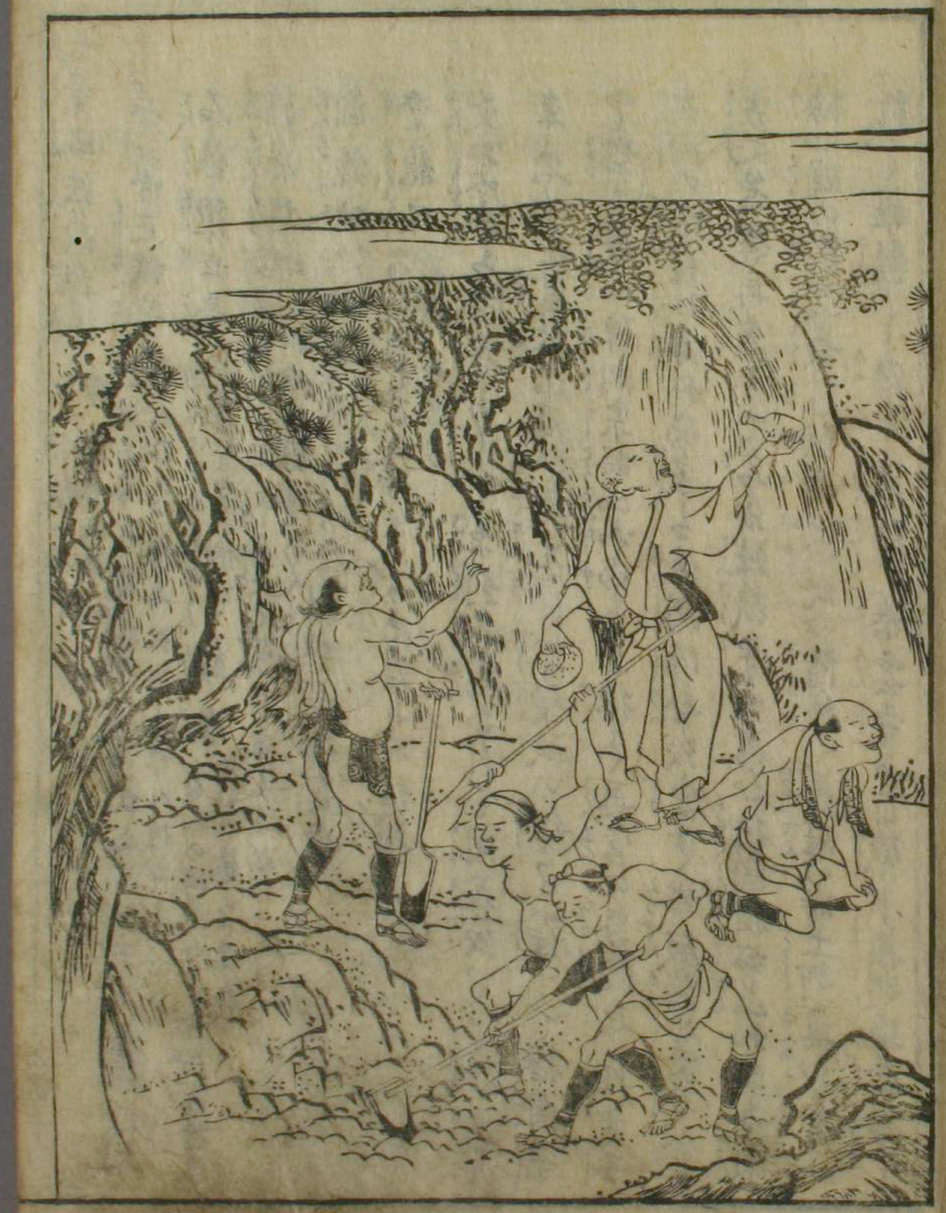
幸社拝天
大和乃
稲荷祠

窟雑天
紀高
梅若塚
鬼見石

高安山一郡の東にあり平城帝の時烽燧を擧し地あり
日本紀曰壬申日野の烽火天武十年正月河内國高安の烽
軍器の狼煙烽火形りとそれ平城宮に通ぜしなり他國の軍
峯ぬれをそれを見つぐく沙弗みたをくを見て遠さうの
軍勢あれまり皇兵ぬかるの所ふ見くくくくくくくさい大和名所圖會曰
火の壁の所ふ見くくくくくくくさい大和名所圖會曰
又元亨釋書曰寛平九年沙門明遠高安縣の人なり
駒谷の仏家ふ入りて帰ふ中をなりけ地風流あり雖波乃うら
函の海北ふ門渡く遠ふ見えつうく出牧の猿地ふ
高安里 和名抄古添名
宝治文書
雲とそれ和性馬北山のいうあんふを出も雲ふ高安の里 源家長日記
影六帖
我をそんうこい度物ふ月さく夜うのう高安北里 後人ふに
天本
それ世とそひう立田の山北端の育の月を高安里 略長明
日
高安ふうつ果にくわふ時名いち度の山を越くかうふ 公朝
名産高安木綿 山邪内の農民綿を高く作て紡ぎ織く女ふ老ふ男女共
幅廣く深ふ越ふ織ふ強地是を河内木綿くう 他郡ふ賣く
八尾久宗ちの高人村々弘めうく木綿を買弘
織しかと河内うひの木綿買まち町ふ地白ふ賣り 外村人

獅子吼山教興寺 教興寺村ふあり 一名高安ち又法華三昧流と雖ども
宗旨 真言律
本尊弥勒菩薩 聖徳太子作 像 蓋山魏然を連り初ち秦川勝の建
安寺いあり高安寺ふ大度ふ 伽藍
長さを丈余 秦寺ふ中に 近年大門田 灯田 ふ宮の古 荒廢を今村中
近年覺玄比丘再興を佛殿天井の画ち蟠龍を畫しく狩野
永伯邑信の弟ふ
本石風系あり
天照大神高座神社二座 延喜式曰大月次新嘗元春日戸神社と号に
教興寺村東の山窟にあり 今弁財天
中祠しく教興寺の堂内ふ安に神像あり弘法大師の作
長七寸 例祭六月七日 所の生ち神ふ回弘ち腹ふ
て巨巖巍巍そうり一圓の岩窟を神座ふ茅ふ龍ち居
あり頗る天岩戸ふ似たり
代うのそうく
形るべし
白飯瀧 岩窟の南ふあり高サ三丈 土人雑天滝と
稲荷 稲荷社 山梅岩寺
黄檗風恭見和尚開基
掃部神祠 黒谷村ふあり三代實録曰貞觀十六年
十二月授従五位下
八大金剛童子祠 黒谷村山中

郡河
法濃寺



高安郡の山里
郡川のかたへ
千塚とて
大古の
窟多し
其中より
陶器出る
これ神代
よりの
品物
なりて
猿田彦
命の製
なひし
面〻人

大覺山法藏禪寺　那珂郡村ふかう
禪宗曹洞派

本尊正觀音佛殿ふ安置し黄金佛唐僧長五寸脇士　龍畢門天
石像觀世音　相傳弘法大師の作なり　右不詳る偶ふ弘法大師の鐫し　鎮守　當山の鎮ふあり金毘羅権現
清涼塔　好山和尚の廟塔なり　の神像を安置
圓鏡池　堂前の池なり其外朱雀池玉蓮池
登龍阪　當山へ登る坂路なり
文殊山古寺　存ふ石勅石

年々荒蕪ふ及び衡元孫中興流の僧こふ住して極樂寺
ふ歸を厥后曹洞宗好山和尚ふ捷く再営の發願ありし者子
當時の現住仁海和尚家ふ並洲所命ぜ受く佛殿諸堂寮會
方丈等悉再建して名ぜ法藏寺ふ改む抑開祖好山和尚ふ南
海四國の刺史長曾我部泰氏の裔孫ふ若冠の時土州真如寺ふ
於て薙髮し遊方の後防州泰雲寺ふ首職し擢州退藏寺ふ

天桂禪師ふ從て扇法し終ふ寶暦十一年二月廿三日當山ふ於て
寂し年七十二代益洲和尚も亦同姓同姓の人ふ在て止職し精
舍の營建怠ず道俗高く禪師中ふ丹青ぜ好む茅園ふ遊び
画名を隨緣齊無礙ふ号し沈氏ぜ者流を慕ふ虎ぜ図して
其精妙を盡す

霊泉寺の東南懐抱園の中ふ傳云當山和尚ふ水乏しく
而の時ふ濁流しく憂ふ服紛川の渓水を汲て用ふ云れども
紅る事一七ヶ年一衆祈神願ぜ並洲所水土祇神ぜ
それ云う優婆夷と雇く横ぜ罷る事二町許ふ穿ち山中ふ井戸を掘ん
一滴も出し優婆夫ふ労し大ふ並洲勤く今十間斗
穿べし夫又岩ぜ碎て罷ん穿べ入るふ不ふ及ぶ或の一の
多極ふ的く霊泉涌出る事ぜ
の意弱ふして衆の極ぜ入れ
ふる事已時ふ及ぶ
感ぜ

題神霊泉

上自龍神現夢中昆明緬想漢時功
刺山勢向巖崖發卓錫心依勝槩雄
碧水春寒横竹引銀河夜冷透雲通
禪餘茗飲甘瓊液更愛孤栖聽不窮

肥後州
禹韓

題法藏寺

百尺丹梯到上頭　招提構在薜蘿幽
神仙縮地三千里　雲樹連天十五州
歆枕溪声宵作雨　鉤簾嶽色晝當樓
亦能闢士經營力　無復山崩崖壞憂

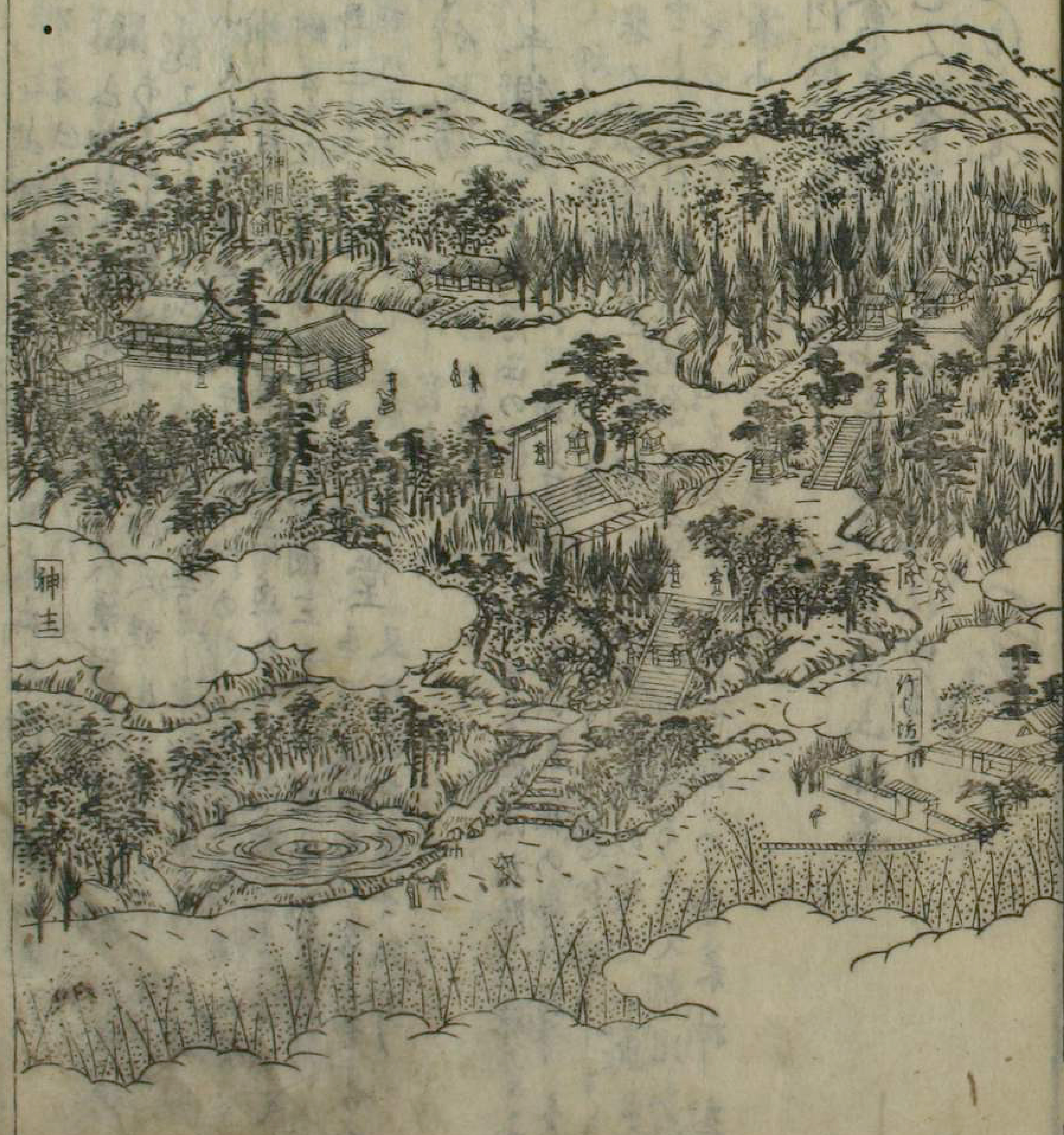
益洲

高安故城 法蔵寺の上方にあり 傳云天智天皇八年二月高安城を築き 持統天皇元年冬十月高安城に幸れ 文武天皇二年八月高安城を修し 又大宝元年八月高安城を廢して其林具を大和河内の民に賜ふといふ 五老峯といふ永禄年中松永久秀の塁あり 五老峯是中にあり 土人鬼が岳といふ 其上方を四百殿といふ人家の地なり

鬼額 相傳ふ松永の軍勢五百人にて小城なりし所なりとかや

木上 千塚村服部川村及法蔵寺山内に多し 大石を左右に積て上を亦石に蓋ひ 門のごとし 口の廣サ五六尺より壱丈余 奥の長サ六七間許 中の廣サ壱丈余もあり 高サも壱丈余あるもあり 又小なるもあり 凡六七十箇所 中に崩るもあり 大なるもあり 法蔵寺境内にも定かならぬもの多し 其より山中に甚多し 窟中より陶器 金環 銕鏃 剣 鏡 銭 石の類出る 土人これを云 むかし仙人の住所と呼び 又は仙人の隠れし所とも云 神代の遺跡ありといふ 又の説に天下旱りの時 火の雨ふるによりて民是を避けて此穴に隠れしといふ 又塚穴ともいふ 毎年なる事を語り伝へ しかれども書にもみえず 此縁え詳ならず

王祖神社



佐麻多度神社　畑村にあり　延喜式出又澄廣錄に載す

真德麿古跡　畑村の中にあり　土人燒冢と稱ず　一説に後德百濟王の後裔なりしと畑長者と号す　延暦中の人と諺曲弱法師に見えたり　大坂天王寺南門の外に真德街道あり

王祖神社　神主村にあり　延喜式に出　近村十一箇村の生土神　例祭九月十日　社記云和銅三年の鎮坐なり

末社　吉野三十八所神　恩智　本地堂　下院の地にあり　釈迦堂也　又傳に地蔵堂なり

蘭光寺竹之坊　当社神宮寺　真言宗止住寺　八王子　蛭子

本尊千手観音　壹演傳正の感得　傳正は弘法大師の孫なり　初め当寺に山の麓に忽然として玉祖の神鏡を千手大悲の形容現出　傳正は鏡を寺に納め　鏡の腰に蔵光寺と記す　又朝比奈義秀の書あり　村の農家に所有

河内國蘭光寺者
鐘銘之由所傳也　お寺并田畠山林ホ
甲乙人等不可有乱入妨之状如件
文治元年十二月日　平

朝比奈書翰

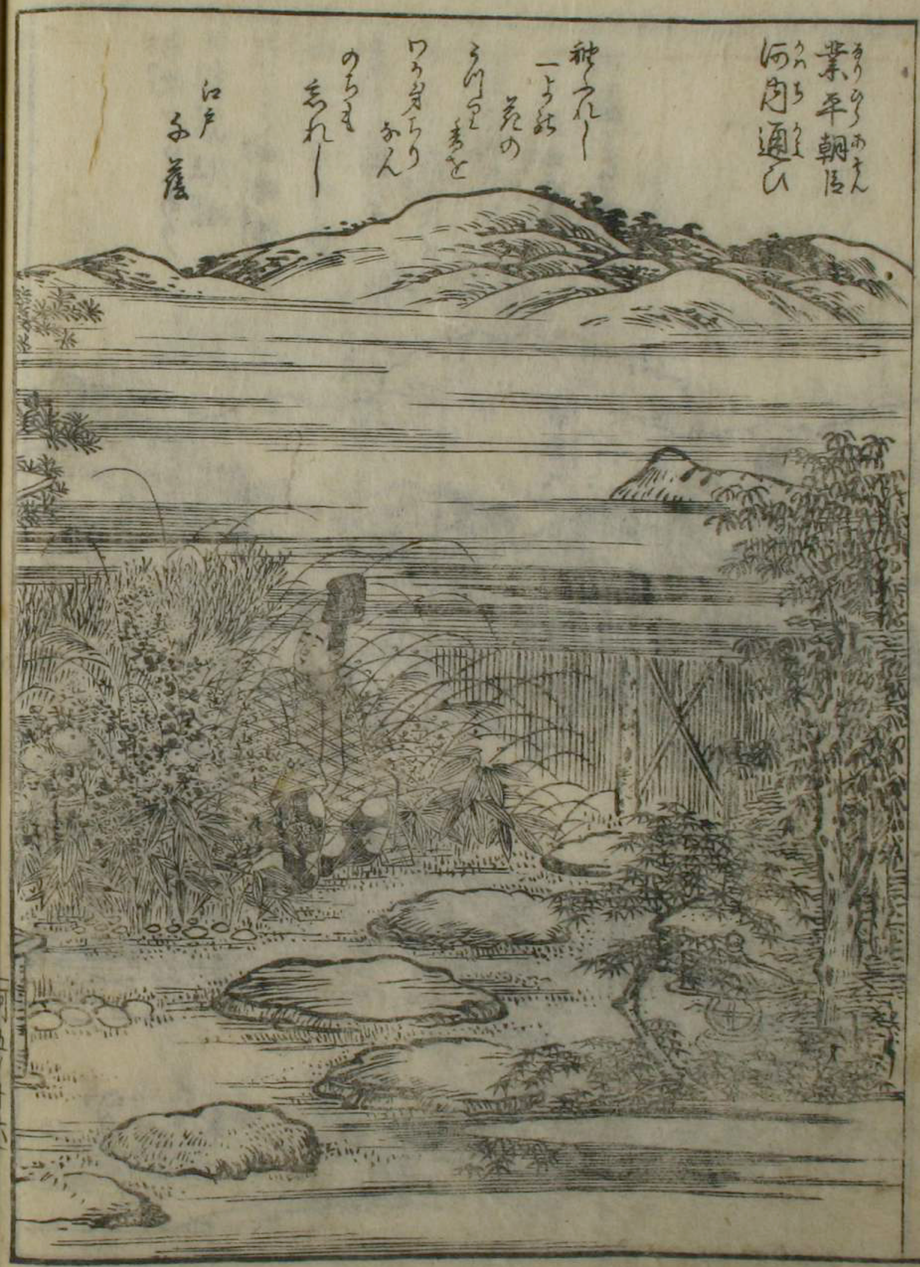
十三峠　神主村　大和國平群郡の堺にて廿三町　嶺の路傍に碑あり　十三街道　大坂より大和龍田法隆寺へ行く者の道なり　茶屋あり

業平河内通古蹟　土人云十三街道の内なり　左中將業平　恋の水　畑村の中にあり　業平河内通の時　此水を飲ませ給ふ　其時業平の詠歌　恋しくば訪ひも来ぬべ山ぶきの　花の陰なる水を尋ねて　其時の人　恋の水と渡の世まで　業平の和歌を小板屋の　とそよふるなり　今ホ山畑の村の中　里人小板屋と云　業平初て出る　小板屋の間より硯の水　其時の人　恋の水と渡の世まで　業平の和歌を小板屋の　とそよふるなり　今ホ山畑の村の中　里人小板屋と云

十二峠

長掛岩
ふえ吹雲
恵の水

多欲空しゝあり
叶霊験清冷
にしゝく四時湧
減ずゝ日々の
夏日の渇を
去のぐ其命ゝ
地義あり
これ公水の
地義ゝゝ
姿見池
横立村


業平朝臣
河内通ひ
神代にも
一よ計
花の
あるかと
思ひ
わびぬれば
あやめも
知れぬ
江戸
子蔵

笛吹松 十三街道の小池の上の峯にあり在中将河内がよひのころ
衣懸岩 此松の本にて笛を吹きて越しとぞ 又其のちに紅梅にあり 笛吹松の傍にあり在中将河内がよひの衣を
干すよりしか名をよぶ 又其後紅梅澤の辺に咲りん首なる
ところに 頓宮社ありといへり
別の水 神立村になり 大和國紀有常がむすめ貞女の操をたてし
はなれ 業平河内がよひしたまふにあたりかの女のもとにて
ある時 にほひかげこいたまひ 大和のうたをよみ侍りかはせ
在中将は 縁のおくまで二首の歌を書きとどめいせものがたりにあり
かの女と 高安の里に來りかよひたまふに かの女のもとにて窓のもとに ものうちながめて
心ならず 二人のもとにてありける時のあはれさ
高安の里に来りて 飯をもりけるを見てうとみけるにや
かのをんなは手づから飯をもりける 女の振舞のいやしきを見て
窓よりのぞきし男のさかしき人になりけれどかの女のもとに月日をへて業平
筒井のうちの女は 貞女をおもひし高安のをんなは此時業平の来ざるを
大和の女は貞心をおそれしらずとも 此時笛吹山まで
縁やうすきかはりをもなく 送りかへりけるが
かこへはおげおあとより追ひけるにいと目の
ばたらしくおぼしけん 池のそこなる松の枝に
のぼりて ゐたりしに女ありて月かげにきえかうはりしを
業平これにおどろき 思ひおぢいて池のかたへ入りける
わかれの水と名付けて 別れのみづといひ伝へて又高安の里に東に窓を
嫁入の時は ここの水をのまずといへり
あけくれ 窓をいひならはせりといひ伝ふ

かうちの國たかやすのこほりにいきかよふ所いできにけり　さりけれど
このもとの女あしとおもへるけしきもなくていだしやりければ
をとこ こと心ありてかかるにやあらむとおもひうたがひて せんざいの
なかにかくれゐてかうちへいぬるかほにて見れば此女いとようけ
さうじてうちながめて
風ふけばおきつ白波たつた山夜半にや君がひとりこゆらん
古今集よみ人しらず　詞書云　むかしある人こよなくあれたる大和國かづらきのこほりなる人のむすめに
すみわたりけるを この女親もなくなりて家もいとわろくなりゆく
あひだに この男かうちのくにに人をあひしりて かよひつつかれや
うにのみなりゆきけり さりけれどもつらげなるけしきも見えで かうちへいく
ごとに 男の心のごとくにしつつ いだしやりければ あやしとおもひて もしなき
まにこと心もやあると うたがひて月のおもしろ
かりける夜 かうちへいくまねにて せんざいのなかにかくれてみけれ
ば 夜ふくるまで琴をかきならしつつうちなげきて このうたをよみて
ねにければ これをききて それよりまたほかへも
まからずなりにけりとなんいひつたへたる
まことにみやびをきこえて あはれかなしとおもひ侍るかうちへもいかで
ありけるもみさのもとにすみつつ見ればはしめてかかる

いくもなくうりされ今いまはけくくるはうらいおるひとうてけこのうるとりのふ
そうりるをそなくんうかりていをを成ふりうられたかの安大和の分と見やりて
若ちあるうり見ほくをらむ伊勢物語山をかうるうもないうちうを
やいひくくえワたふ四してやまとくんといてうよ後こひてまりふ
たひくくもれぬれを

君ち　とひひ　ぬてふ色好きいたのまぬのこひ法師

法師去削の圖疑抄曰伝説を紀有常の女とす
伊勢物語の注書古素隱抄。拾穂抄号孤考ふ業平の業平の所謂の古人文章をみやび歌ふ
秘決抄。拾穂抄号孤考ふ業平の業平の所謂の古人文章をみやび歌ふ
書加人く古れ奇を引孤四人又其尚ふも出してて紀の和歌
少し　七条の后温子ふ業平の和歌
其證ふ其時代高貴の人乃名を
伊勢の彩抄ふ
卒ちり好色の卒とあるく書
伊勢人ふ傳といふ卒古ふ多し
勢語古意ふ
詳

河内郡

花岡山神　村ふあり伝地慶長中の戦場ふ南方軍記ふ詳ふ
今浄土宗の佛刹あり
御祖神社　大窪村ふあり延喜式出三代實録云貞観二年十一月
授三正五位下ヲ伝所の生土神ふ延喜式出
鴨神社　大竹村ふあり鴨ふ伝所の生土神ふ
樂音寺　樂音寺村ふあり
今某所ふ
春日戸社坐御子神社　延喜式神名帳河内國高安郡の郡下に出ふ
今然坐所
河内郡　東ふ和州平群郡の界ふ北ふ僕良郡の界を限ふ
南ふ高安郡の界を限ふ
伊駒山　河内郡の東ふあり和州ふ勝信ふ大和名所圖會ふ出ふ
高嶽南ふ長し　岩石ふ樹ふし
篠原村ふ能凝し　茅ふ能凝し　南方所見ゆる
岩の麓ふ山ふ
傳ふ和泉五年正月河内国高安郡の燈火を慶しく始ふる見の
燈を置ふ日辛後紀ふ見ふ
ふ往馬山の記ふ
いつふ伝所ふ
後考き

我宿の梢ふ多ふある時ふ生駒の山ふ見ふ　能因法師

わこのやふ大江の岸ふやうしく雲ふ見ふ生駒山ふ　良暹法師

新千
子規いろ濃山や色ぬるん風てつる雲れわうふ明るり　光明寺ハ大阪大師
彩勅　法の月々しくもとるとこそ歌文ふ名わ光りし川　大伝正　弘基
後古　生駒山よ雲ふ沖ふ尾の沖ふ出てめふを明らぬ峯れ天雲　源家長
延保百首　秋の色紙更衣のくれふ尺させ生弱の嶽ふ付面志ふ名ろ　正三位　忠定

御野縣主神社

鎏敷延喜式出上ノ郷村野郷ノ辺ふあり今天日ノ社
寺井　福萬寺村ふあり　清泉　井味

津原神社

延喜式出市場村津原ノ浦の側ふあり今玉串明神
池島観音　池ノ浦村ふあり　正観音ハ安ノ

恩智川

源高安郡恩智村の小ノ流れ幸郡福萬寺ハ走ハ
仁徳天皇十四年掘り大溝ヲ於感玖乃ヲ引テ石河ノ水ヲ而潤ス上鈴鹿
下鈴鹿上豊浦下豊浦四處ノ郊原ノ以テ墾ヲ之得ル四萬頃田ヲ也
ノ流れ水流れ

岩瀧山往生院六萬寺

村ふあり浄土宗所智恩院ふ属ス
浄土寺ノ

本尊阿弥陀佛

聖徳太子ふ安ハ彫像　釋迦佛　仮ハ安ふ安ハ彫像
長三尺許

仏不詳いふ　内道場阿弥陀佛　長三尺許　金堂の本尊なり
額安岩瀧山聖武帝宸翰　往生院　本尊ふ掛佛
親書聖人像　長三尺許　中興安助上人傳記　宗祚　枝軒
楠正成塔　鎌ノ云従五位上橘朝臣正成霊光寺大圓義龍大居士
敬ヲ攝州兵庫湊川ノ戦死云ル境内山林ふあり
楠正行墓　建ノ遊撃ヲ四条縄手ノ討死の由縁ふよりてくちくふ
尚村を六萬寺ノ天平十七年　行基大士
の開創　初メの本尊ハ薬師佛十二神将ノ安ハ一年天下ふ疫ノ流行
く死もるこの多し　聖武帝ノ墓ふ勅して仏ノ彩色ノ彫ノ飾らしむ
一七ヶ日ふ　聖武帝ノ宸翰ノ米の白毫ノ光明輝曜ノ四方をてらし
ノれ在忽疫疾平愈ル　帝其霊験ノ感ノ対境七十ヶ寺田
一百畝を喜捨しの故ふ勅願所ノ盛衰々ノ仏ノ墓建立
織田四十九院の其一院ノ王織小四十九院を建ノ津ハ弥勒上生境平
経曰此摩尼瑠廻施宮中他者四十九重微妙寶宮の文ふよりかくや
其後年累ノ宇多帝ノ信あり尚山仏殿補ノ合地二十一町
仏寺ノ貞和五年ふい補ノ正行ノ高所直
ふ　九場ノ九輪ノ　仏像ノ彫ノ　宗祚　仏
も掃ノ　仏ノ盗の碑ノ有ノ　刻ノ　仏
収ノ　石田畑の宝ふ仏ノ寺田も没
ノい散々ふ移ノ　親書尾場川右野　場津の大寺ノ寺ふ別ノ村
老ノ親　應の後ノ一つの茅ノ菴ノ　菴ノ　寺ノ　僧ノ人ノ
ノ仏ノ宝ノ移ノ四所ノ乃ノ寺ノ僧ノ人ノ
ノ移ノ宝ノ移ノ　ノ所ノ然野　特現ノ

狂子衆とて四人の社家其苗六籠寺の旧記を傳
慶しく今権現の裏しらの人天和の末浄土宗の僧養浄叡場本尊
の荒蕪公称き宗門の堂上家へ言上し卒堂ふこそる佛を安し常川
鬼取ふたぐ〳〵修験絶切の地とし〳〵ゆ人当山女人の系論をせろ〳〵
女を学ふ女人の大峯とそ称しろる

○当山ふろう鳴川へけぐ〳〵るる山浄ふ名所多〳〵

大覩岩　小覩岩　浄六原　神纏掛　矢上　國見石　金拾池　八葉峯
鬼足印　若窟　毎懸　釋迦嶽　掛義滝　新向石
九重塔址　正行城址　堂之芝　小雨降

梶無神社　鎌延喜式出六萬寺村の屋邑摺井ふあり今船山明神と
称し社の小ふ梶無泉　無しとて地名あり
櫻井　接井　村ふあり清泉

四條畷戰場　四条村の爰内系御道弧ひて南朝正平四年正月廿日楠
太平記云　正行戦死の所ゆり或ハ云四条縄手ハ後良那北条村ふあり〳〵云

高師直陣泰ふ淀八幡ふ就て猶諸國の勢を待調へく河内へ
向ふべ〳〵ゆ議〳〵ろるゞ楠已ふ逆寄ふせん為ふ吉野へ参く勝ゆし今日
河内の往生院ふ着ぬゆと聞へろれゞ陣泰ゆろ正月二日淀弧ふく武萬騎
和泉の堺乃浦ふ陣を取陣直も翌日三日の夕八幡を立てく六万騎四條縄手
ふ着ゆ陣やゞて相近べ公れゞも楠定く難所を前ふ当て相待ん寄てろ

無ろ長寄ろ〳〵い便あゞ〳〵ゆ三軍五所ふ分ち名雲の陣をかし〳〵く
陣ふ設け陽ふ備へ中略　楠常刀正行金剛正時和田新兵衛高家今井新殿意
陣ふ構ひ賀茂三十騎を率〳〵く殿ふれろ墓直ふ四條縄手へ押寄ゆ行候の
敵ふ切け散さゞ大将師直ふ寄合て勝負弧決せんとゆも擬議ゞ進んぐろ縣下野
守ハ白旗一揆の旗頭ふく遥の岸ふ立ゆ人ふ〳〵ろ伝が菊水の旗ふ一流是非ふく武名ろ
の陣へ切へんゆ〳〵ふ伝をろ〳〵北の岡ろ張下ゆ馬ろ〳〵と乗下てゞ今敵ゆ
切へらんゆ〳〵ふ遥弧一文字ふ遮て東西ふ調と立ろ徒立ふ成く戦ひ合ろ勇気
嬉ゆろ楠勢僅ふ徒立ふ成ろ敵弧見て些塩ゞ二ふ分ろ赤陣の五百騎周々
ゆ対て切ろ宗勢秋山弥次郎大草三郎左衛門二人直前ふ進ぐ射落ふ吾野
七郎是を見く敵ふ氣を付〳〵ゆ秋山が郎ろ上弧乗越て爰をの敵ゞ切ゆ
射向の袖を押く小跳して進んぐろ敵東西ろ雨の降様ふ射る矢ふられも
内甲草摺の端二所貫通ふ射られく左力を倒ふ付く其矢弧投んと立て
所を和田新兵衛尉義盛て首搔切て落てろ　下略

四條縄手
合戰
楠正行
討死

往生院
六万寺村
神生院

平岡多居
六萬寺村
楠家
楠正成等
同正行墓
平岡多居

本社

牧岡神社
来迎寺
神宮寺
社司

牧岡神社四座　出雲井村にあり國史延喜式に出　九月九日近村十四ヶ村の産土にして當國一ノ宮と称す祭祀を修する例祭

祭神　一　大日靈尊　二　天津兒屋根命　三　經津主命　四　武甕槌命

若宮　天押雲命を祀る　本社東にあり　末社　豊磐間戸命　櫛磐間戸命　石階の下にあり　其外末社多し

猿田彦祠　若宮の南にあり　榊祠　神主の宅にあり　天照大神を祀る

延喜式云大月次相嘗新嘗　兼和六年冬十月授
正三位勲二等天兒屋根命従二位從四位上
比賣神正四位下
三代實録曰貞観元年正月授従一位勲三等天
子屋根命正一位正四位上勲六等比咩神従
三位兼和十年平岡大神社官等永預把笏
貞観七年冬十月勅神主一人給春冬當色幘
料絹布等如平野梅宮神主又春秋二祭差
神祇官中臣宮人一人授祭事兼付幣帛又
差琴師一人供事祭場立為恒例十二月勅河
内國平岡神四前准春日大原野神春冬二祭
奉幣永以為例

公事根源云

神護景雲元年六月廿一日武いかづちの命常陸國鹿島より
御出ありし所にて柳の木の枝を
御むちにして伊賀國なばりの郡にうつり給ふ
御ともに中臣の連時風秀行といふ人あり十二月
七日に大和國あべ山にうつり給ふ同じき三年正月九日三笠
山に遷座ありて天兒屋根命と比賣神の両神の御神を
此所にうつし申させ給ひ武甕槌命を下つふさの國
香取よりうつらせ給ひて天兒屋根命を河内國平岡
よりうつし奉り比賣大神を伊勢國よりうつし奉る
されば比賣大神は天照大神の分身にしまします
なるべし　下略

まつり　二月初の申の祭年毎のまつり是を上の申の日
使を發遣せられ幣帛を献じ給ふ　云云

當社に毎歳正月十五日占穀の神事あり　神前にて
粥を焼き五穀を其中へ入れて竹の管を編て一くさに名づけ
書付て釜の中へ入れ神人これを取出し管の中へ
五穀の入様の次第を考へ其年の豊凶を生ずるの説人あり
告しらしむ是を管粥といふ此祭事所々にあり
難波名所図会にも見えたり

髙津嶽　當社の山嶺をいふ　照澤　新家村の北にあり俗に姥ヶ池といふ

白水池　姥ヶ池の南にあり池の水白し　故に色の強きなるべし

一ノ鳥居　本社より六町許西参詣街道にあり　御旅所　豊浦村に神宮寺あり本尊十一面
觀音長さ一尺五寸の立像を安置

當社は御神の靈驗あり　天正年中豊臣秀吉公三尺太刀
捧げて百萬の兵を指麾し給へて萬國の珍寶賓服して既に

天下の威を聞くに者おそれ是上奏して曰近年足利天下の権を
持ちて官領互に鉾先を向へ王風衰弊して天業衰微
半かば不倭尾州に出誕の時母羮の中に日輪を呑み日く妊
身を依之日輪の照を所麗下に属せんと云へり中略
三軍五兵の運を徳の求めりと申せば願い勅宣下りて関白乃
至職を許し給つゞ仁政を施し国民を撫育せん王道衰に帰し
四海清平ならんを奏し給へば百官感奏して逆に勅許に
預る時に近衛前久公龍山公 関白を執柄の職にして武家これに
任ずるの例いまだ聞こえむ 天子の外戚摂禄の外これに任
ずる例か 中略 獨遊を給へ御れども早勅免あれば是非なく
龍山公薩摩国へ左遷の御身となる成り給へ御れども二度も終に
帰洛し給へと聞く 御下向の砌に御船ふめられ波
浮江河尻の者に御舟を漕れ河内国平岡明神に遠祖天児

屋根の御神なれば御神に祈誓あり其時神前に御歌あり

ほのぐきけく迎に衛もそれかゝで身に百歳せん遠津海宇 龍山公

ちかくやはらぐの果まで御下向なり給へ留別の御ことゝろあや
神酒に戴き給へ御土器を乞せ給へ其神器忽然やしく
破れ給へ神人驚き給へ御土器を乞せ給へ又碎く前のごとく故に前久公不
思議に思ひ給へ先に此度の神酒勅宣被下明神へ奉れ給ひし
つゞ恙も御ありなる神人従者も奇特の霊を拝し給へ龍山公御神の
遠孫にあらせ給へ百官に下知せ給ひ特に徳の勝れ給へ
御奇端なりしと人々奇異の思ひ給へ
星の臣にもひは及ばれその元賢者位に上り給へ時に徳星天に見る 英
齊に周の栗氏参じ屈平に廉直を諸人高く張く嘿々
子陵に厳子離に隠れ給へ嘿々平岡
明神に公の精誠に賢を乞給へ御土器に乞に反かつ

又神徳の新なる所と共うり額田村の奥なる不動寺長尾瀧などに見
めぐりゆく所船ふなれば年の浪風をたのみてこぎ出ぬ
おもむき侍る

さつまの國額娃郡に天満宮社所建立あり
懐中抄　かりの渡　たの発ともあきれふしふもふ人ぬいりはをしさのうの湊ふ　武山公
名寄

右の旨記る寛永十九年　額田寺社領の奥書に粗見へたり　慶長十二年の
後所帰洛ありしかくて洛東慈照寺銀閣の風流閑雅しかも又元禄十二年巳卯の秋天下旱魃も其時近衛関白
大政大臣基凞公祈雨の所詠歌所に自
大明神の神殿へ納まる所忽霊雨頻ふしかく五穀豊饒も其時乃
所なり

比良とふあ海そうさ神ふ民ふさ
ふ所短冊神主名る居氏ふ之ふ後早の時祈雨ふ神殿へ捧げうと右令あり
て名居忠勝へ渡ふしかく当神寶移ふ比家ふ傳来しろる所り
寶基杜明神の弦屋尾花塚平居山さふ　基凞公
祝辞石四位の掃しらふ千代古道名居の家乃
側ふあり　道武り

正月十五日
所の占之神事

此日女竹の茎を所の記
五十四名れ他の数ふ表
見弦あるて盆れ中にわげ
所の茎を巻く其茎
中ふ入ふ小豆を用ひて
そりて見弦考豊凶
を上下にかち踏特を
ふ其年の占成
る事ふ告しむ所ふ
の弦人年穀の占を
ふうしかう耕地乃
一助せる事仕吉の
豊凶ふ入て今ふ所
事ふ所を衛に神主の
ありがたしかくし

神楽堂中所供所の
所ふ仮屋ふ所り
神所と所面しかく
茎を如くし

其八一

其二

神粥占祝詞の畫

此摂津の中い神主
鳥居氏乃秘伝あり
其外の社家ゑ見神
ざるより

神粥之記

麦くさ　こて麦　むすめ
ゆ麦　ふしろ　おそ麦
早稲えさ
四十日　いつも候　あつもせ　さのつ
いしたち　ゆすち候　ゑざい　さくろう候
あげ　ゑ田のさ
義ゑ候　ろくろく　おくて候
いーぜ　いーぜ解
あげの中田さ
ちくたち　たんぼ　こえのうりとき
ごぜん解　ものち候　ひゆの稲　おええうち
ひゆ候　ちこ　あせんぼ
あげの畑さ
ろくごる　うちえび　まめ　ちぐさ
いも　そを　あうごる
卜田のさ
いーぜ　いーぜ候　こえのうち　ひくえちち
のつ　赤せんぼ　ゑやえうえ　十ぜや
卜の畑さ
ちくごる　赤ごる　まうも　いも　うちえび
ゆくえび　あづき　そを　さうく
以上五十四品

解除川神おの細川すり　夏越岩　夏越川ふかる　御祓所　豊浦村屬村箱反と新家との間ふあり土人一年ふしらの行合橋　夏越橋をいう

粥占神事　毎年正月十五日　巡鰐　年久しくそしく年朝　巡史ふを出せり　近隣の農夫集りて其年の五穀の豊凶を

如卜　土人云ふ街道四條村の間ふ出く住還の人の過ぎ給ひ我思ふ年の吉凶を解ふ古ふ云ふる

古字表見ふ

豊浦
素絹

大塚　四條村ふあり　梅ふ正平戦死の塚の都　所ふ東　戦死の塚ふんふ多く戦中死亡

大澤神社　延喜式出　旧水走村ふあり

栗原神社　延喜式出　古原村ふあり　今梶原宮と称す　牧畑の神

焼ケ火　土人の伝云むり　冥罰ふやあり　ふんかの焼見る沢の池の名　焼ケ池ふ身を投空しく光るの

それうり池の名　焼ケ池ふ　其火　焼ケ首　吹出せる火の如ふ

出くゆくゆく　其人を　其火　焼ケ首　吹出せる火の如ふ

人作るふ　妄　焼の火　しひ　安

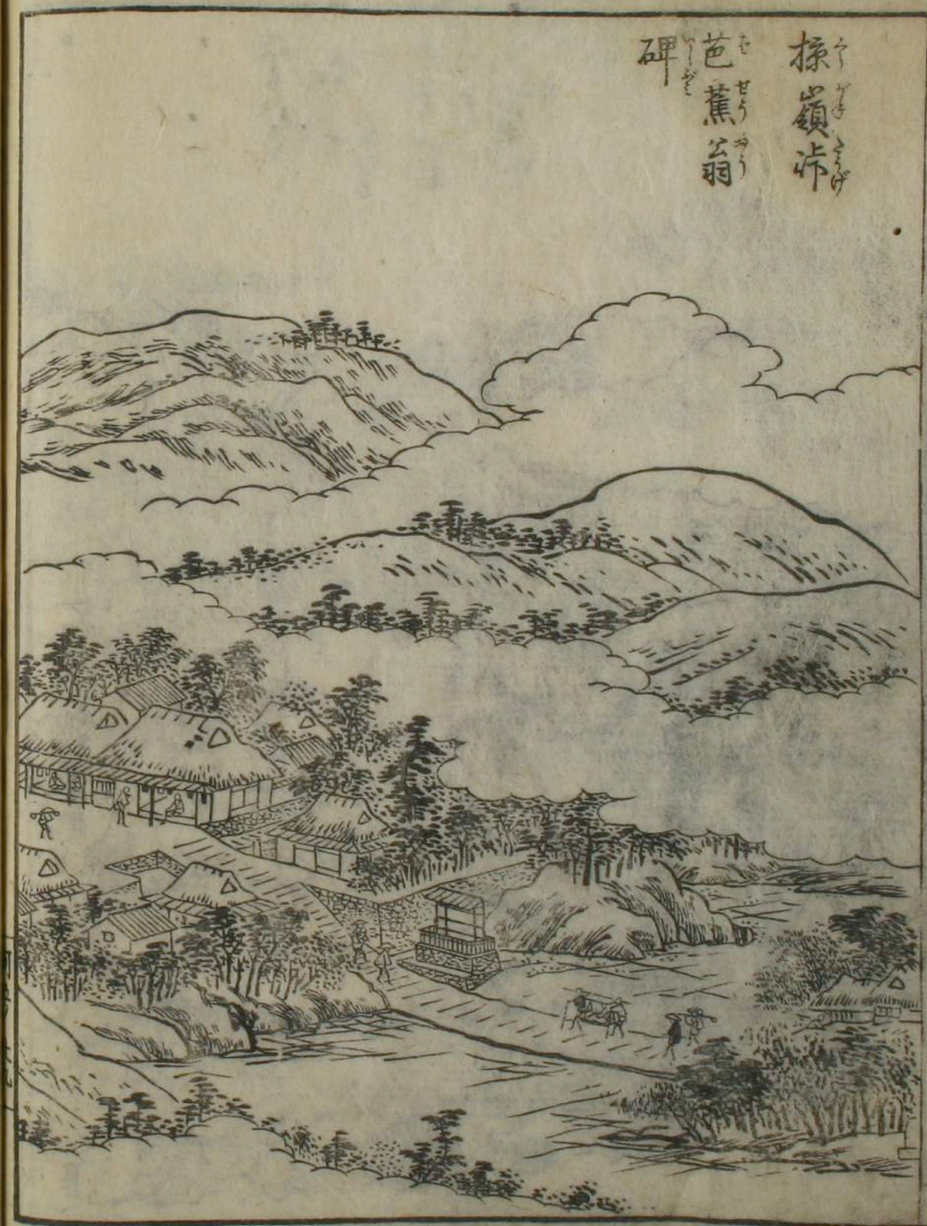
恩智　花　反　反　反

のあり　烟霧　反の後　暑熱　地　熱ふ　郊　自然ゆ

火を生ず　地を　くく　年　遠　遠　人　人

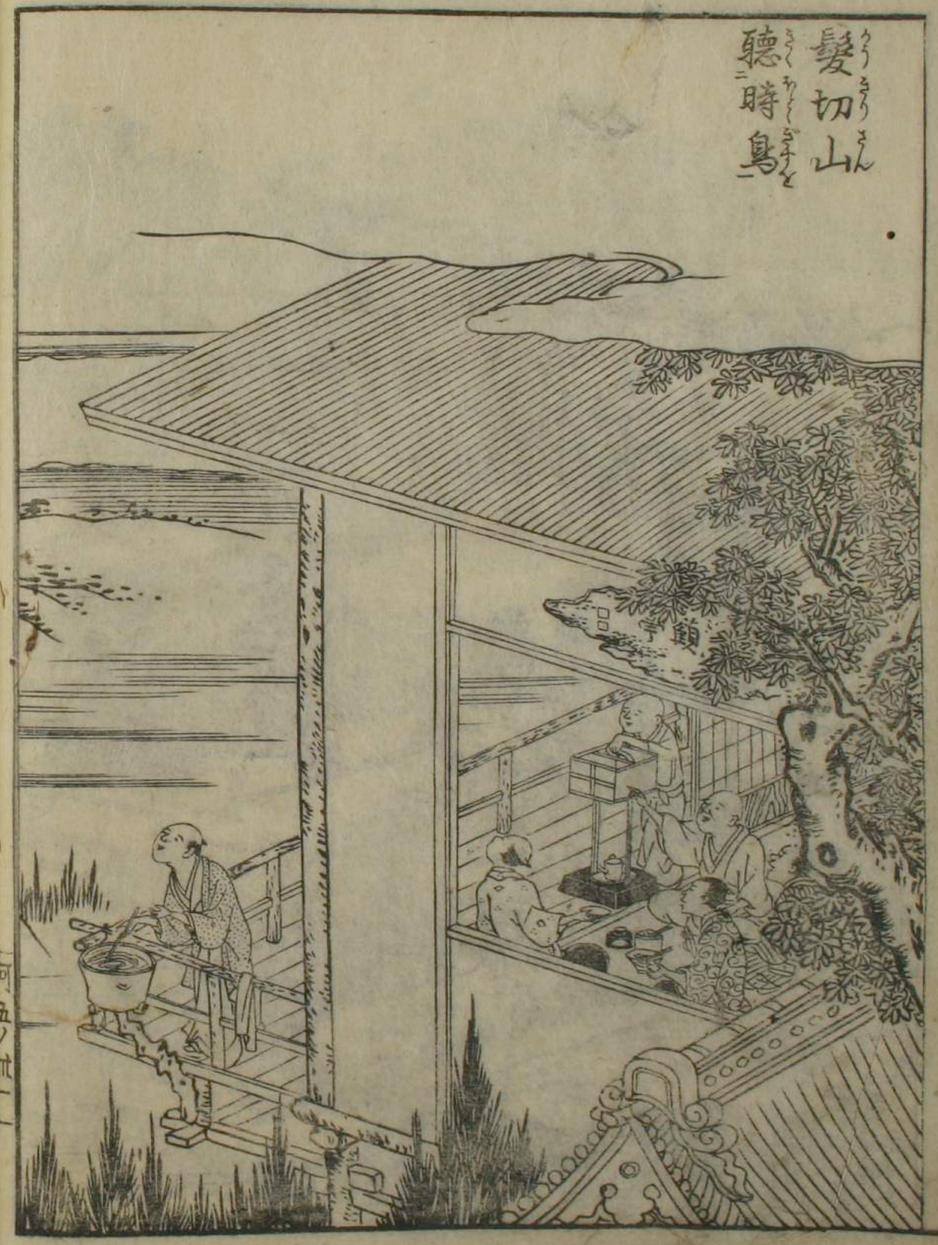
平國乃
宮居の
すがひを
迎待うり
集りて
かゝを射せ
いどみあひ
武神を
軍神をれを
こもあん

投られて
礼して
をるる
きゝ
立芩
浄神燈


芭蕉翁
碑

髮切山
慈光寺

髮切山聽時鳥



先立て流れ行くこれ地中の湯泉の殺もるあり 図を見るべし
くきハ馬場信武の本朝天文志に見へたり
椿ケ嶺峠 世に時峠といふ 桑宮道 峠村に栗原蔵金 東の端に河内大和の
国境あり 生駒の山脈 椿ケ嶺峠街道 大和及び伊勢
一説に山の松杉多し 椿と云ふ 故に椿ケ根の名あり
天正の頃豊臣秀長郡山の城を築れし時 晴れをかく名なるも
伐取て今に大樹少し

菓子屋ヶ原

迫頃 寛政十一年巳未十二月豊浦村の素粕山白俵 椿ケ嶺峠街道の側
に建く蕉翁の一百遠忌の追福 又諸方の俳諸の句を彫くこれを
小冊にして花の二枚の序あり
菓の名を鄙号せり

髪切山慈光寺 峠より三町許ゆ あり 真言宗

本尊 役行者 作自他右に寶剣
親音堂 本堂の北に あり 正観音 石安に役行者 石に の時
尚山坤の方四町に 感得 行人今其地を親音嶽と
鬼髪田 親音嶽の麓に あり 五子塚 麦 ひふあり 行者誕者
今精心田 山王八幡 裏日
鎮守 を祭る
丈役優婆塞を和列葛上郡茅原邑の産く母の麦に獨鈷空う

降て口に入ぬ見て忽肝身し 舒明帝六年正月朝日誕 行人 寺記
三年辛卯十月廿八日 巳刻出誕 七歳にして 慈救呪を誦 唐半月々十萬遍
ゆつて時に聰明叡智にして 修験道に信 年二十二歳の時
家に棄て葛城山に入て巌窟に安居 唐半三十年 葛を衣
松子を食に充て神呪に誦して白雲に駕して仙房に游遊 鬼神に
驅逐して使令 日域の霊嶽を歴せ 半ある時 葉面
の瀧に入て龍樹大士に謁 又金峯嶽に登り葛城の石橋に一言主神を
促て神異妙奇測に為 天智帝の時 駒山の深渓に鬼城有
て住迷これを為に害せ 行者これを降て其両鬼を捕て呪縛し其地
に今鬼取山と云 者に かの鬼髪を擢んで此地の巌陵に塵と両の
役使 金峯山に入 鬼後鬼これを行者その頃遥岑に泊
其為に光明耀 これを半 一字に 慈光寺と云

其景象は東に大和の碧嶽西は難波の滄浪を望く日想観の便あれはもあさ
月は皎々として千岩の水沢訪ひ風は凜々として松林に琴を弾ぜ嘗て
聞むに三千の寺田六宇の伽藍あり東海に遊び東国に帰る習ひ
元亀の兵燹に罹く佛閣荒暴して今僅に存せる薔薇荒墓楊柳
新形にして古木あるのみ

嵩山は郭公の名所なり雑波津及び遠近の騒人和月を月の間に
来りて泊し風流を弄じ詩稿を寺に認む清水納言の紀の言葉
に本々のこれ業なりと志げるに形ばかりでけり屋根も壊れ
無ぐてれ無の事ばかりの有のみ小牧と弥ふおり弥ふおり曇り
夕はるとよ夕はなど志のびうるわ第に世の人と耳うと
おぼゆるまでたゞくしれをつけらんは何のうちはせんや此風
韻に魅惑せられて詠かし　毎年遠近の別士こぞって蜀魂の句を作り
これを棒ずしく　日くの風雅に

不動寺　真言宗平石嶽貴寺に属す　長尾山と号す

本尊不動尊　弘法大師の開基なり　本願を去る里郷保の遠祖高内
結人なり年号不詳　加持水　嵩寺より三町許山奥にあり大師密法
久遠にして今僅に残る　石碑　寺内にあり　迎年高内秀宥の建傳云天正年中
迎湯龍山公牧岡往へ詣し時郷保の祖高内正定
案内して此寺に詣し給ひ其縁を近年
高貴寺の慈雲和尚を請し岩面に鐫し文字に金泥沢
入く不朽なり　其文云

天正年の頃新開白近清和久公牧岡社に詣し給ふ
高内正定案内して此寺に入せたまふ

枯のこる長尾のれうれもそなけていくばくもなく

曩龍庵後

岡茲寺は長尾寺又澍ともいふ御詠あり長尾の薄を今に奚疑
きやかり此寺景傷を見るに薜蘿に松枝に幽鳥に林頭に
嘶く鶯烟寂々香火殿々として清浄無塵の佛室あり

雙龍尾
上滝
古滝
二之滝

長尾滝
不動寺
不動寺

近衛龍山公
長尾龍公
清光しと
和詩を
綴しの人

長尾瀧 長尾山にあり 雄瀑 高サ四丈許 左右巨巌直下に落り
雌瀑布 高サ弐丈許 巌面を傳ふて数段に落

雙龍菴 雄の滝の上にあり 慈雲比丘ここに五ヶ年錫を山に駐む

此雙龍の飛泉は恰も雲に飛で素練を垂石に濺て明珠を散すがごとし むかし弘法大師額田寺に止錫の時此瀧に来りて密法を修しみづから五大尊の像を長尾寺に安じ給ふと云今に病ある者此瀧に浴しぬれば平愈せずといふ事なし 嘗て龍山公も崔嵬たる樵路を踏わけて此錫所の山奥に分入せられたるにふかくも御詠歌有此詠ある雙竜庵主書かし高内氏岩面に鐫ぜられ其文曰

天正の比秀関白秀久公牧岡社に詣るを高内正定

露の御しるしに来り此瀧にとゞめよ
たつ子すみありとも変れ山名れ長尾のれ久の瀧の志ら糸

雙龍菴識

額田神祠 額田村にあり 祭神 額田大神 孝霊天皇の孫なり 應神天皇の御子 御母は高城入姫と申す 難波の葛餝郷に狩し給ひ此窟の頭成姫に命じてやしなはしめ給ふ 桓武帝の御時紀古佐美に勅して神祠を建させ給ふに荒蕪して今僅の小祠あり

高城入姫祠 紀古佐美祠 皆人祠 これら高内の遠祖にして みな傍に当村にあり

額 額田大明神と崇め 有栖川幸仁親王の御筆 高内氏の家に傳来れり

額田寺 同村にあり 醫王山と號す 真言宗

本尊藥師佛 座像長一尺七寸許 日光月光十二神将を安す 弘法大師作 大師此京師より高野山へ下向の時ここに止宿ありし所なり 高内の告人寺と称せり 当村の西 釣斷許に涼衛道とて古道あり 城州八幡より高野山への道筋なり 故に高野街道ともいふ 又紀路とも云ふ 額田林 三日市を経て紀伊見峠に至る

千手寺 同村にあり 真言宗 高野山寂静院に屬す

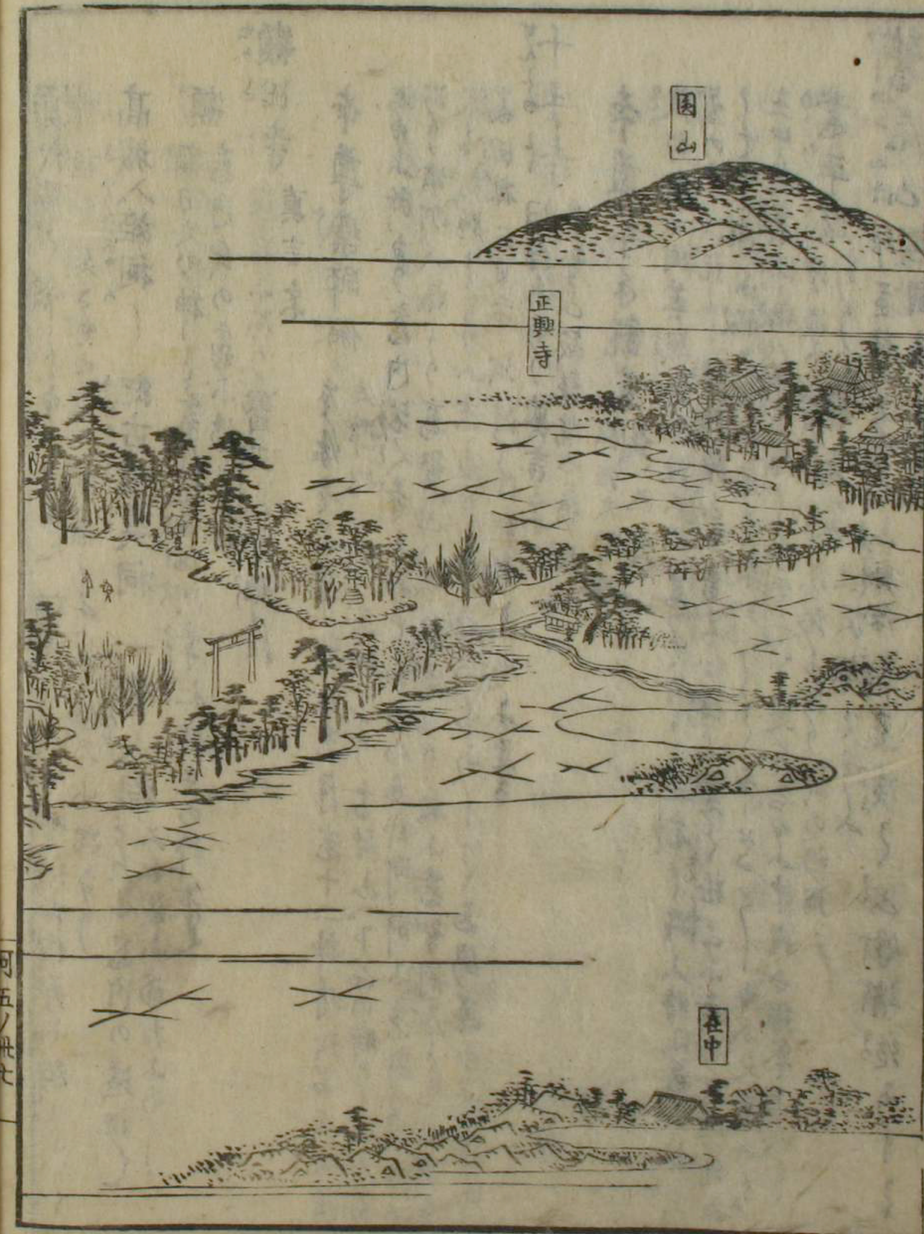
本尊千手觀音 弘法大師作 長二尺

役行者の開基 後弘法大師此に来りて止宿し給ふ時 菱の中に現じ補陀落山の香木を與ふ 鑑之を以て千手大悲の像を彫刻しこに安置す 其の後左中将業平朝臣 諸堂を再建して中興の縁基となる 又天上のし

業平塔 境内にあり 辨天 家土人塚といふ

鷲尾山 神並村の上方に山脈續て山嶺峭絶にして樹木多し

石切劔箭神社
本社


國山
正興寺
春中

石切劔箭神社二座 神祇官帳ニあり 延喜式出 三代實録云貞観七年
下ノ社ニ書社之例 ニ六月十四日 神位 芝 植付 領田 四下ノ号
五ケ村生土神 ニ 神位を賜ふ
興法寺 神位村の上ニあり 鷲尾山ニ
真言宗
本尊二面千手観音 聖武天皇 行基大士 婆羅門僧合作
高山 肇役ひ者同基廟后ひ基 婆羅門ニ 又 法大師も
止揚して 諸堂 弘営たち 年 基久遍 ニ 荒蔵 ニ 今
僅ニ存ス 永禄年中大和丹後守入道浄味神位村ニ
ハたるまで廿四町ニ同 左右ニ 楊の双木 植 年累りられ
て ハ色の書紀 減ず 弥生の花盛 ニ 絶ス
什寶 両界曼荼羅 巨勢金岡筆
十二神将 十二幅同筆
草香山 伊勢上の續 ニ 河内国草香邑白肩之津 云云
神武紀云 遡流而上 經 孔 河内ニ 本 孔 正
神武天皇 東征の時 大和国ニ入給ふ
聖運の用少 東征
古道
萬葉集の長歌草香山ほめたる
忍照難波を過て打靡草香山ニ
吾こえくれば山もせにほひたるつゝじの花の

君ぞ何時往而とやらん、左注云 右一首 傾ニ作者 微 不レ顕ニ名字ヲ

・續古今旅

おしてるや難波をとおかひく茅渚の山ぞ見まくほるかも

茅香江 今南郡内日下村の菅内ふ天子池 御所池 素賀池 少し 侯人もとに

いくあり 古事記云 印 色入 命 俗ニ略下 高津

池ヲ云 比池むら 廣大 沼 記雄 紀 暑天皇の殷ふ引田の老女の歌ふ

茅香江の入江乃蓮 それたちをこのちうにきろうを

歌ふ引田の赤猪おとらふ老女のうあはく 天皇めさんと宮ひ殺ゲ

忘れさせ給ひくいこづふ老女 ふる殺ぬ事をきち〳〵先〳〵

ゆひて賜の作うこと賜へこそれふ

若へちう二首の中 あり

續後撰

茅香江乃入江ふあさ除芦田鶴の何かゑ友ゆ思ふ 大伴旅人

吐懷編云 比哥ふ多紫水四のうこ彩り大納云旅人卿 時 任

まてく上り彩ひ乃る時 沼 弥 沼 松 の 紙 紫 より 彩 ん 寸 ふ 比 ず し

草荊里 或カ云 日下 邑 紙 ひ ふ く 彩 ば

藤 塩

古川の入江乃あ〳〵ふ多ゑうれ〳〵くさひく成ぬ茅かりれ里 師先

日下瀧 日下村大彩ちうり武町詳

ふ奥ふあり

涼〳〵さや三千尺の瀧れいぜ 水走梅園

瑞雲山大龍禪寺は村ふあり 往 宗 黄檗派

佛殿釋迦佛 殿内中央ふ安ル

選佛場 佛殿の右ふあり 紀ふ紙安ル

鐘樓 選佛場の西ふあり

額 圓通閣

聯 表門の左右ふ掛る

惠極の筆

翠竹蒼松明ニ徂意

瑞雲彩氣殘ニ山門ニ

禪悅堂 佛殿の左ふあり食堂ゑ中央ふ

金粟良苑 紙安ル

開山堂 開山惠極和尚の像紙

安ル

開山惠極和尚

表門 額 瑞雲山

開山惠極筆

石橋 幅六尺一枚石

寶永年中の建ふあり市預ふ大坂林氏常悅居士ふ

因云 當寺の市預浪花津ゑ

る信大若根の功德ふ

ふ甚佛の云法王の茅生ふ林氏常悅居士ふ

師菱覺ふく坂氏ちの住職を

のふ孫ふも六字の名號紙

今ふ東坂大森氏ふ

偽素〳〵けるゝ

富景樓 右田村右田氏の宅ふあり氏池の領主斤相模ふり聖堂ふ似て

書目錄ふ委〳〵 右田思云二百石を寄附〳〵く比樓の不朽

・みげうう監讓〳〵 富景樓十景日

駒山朝暾 高安秋月 弱江斜陽 櫻井春烟 水田白鷺

恩智流螢 麥隴錦雉 金嶽殘雪 池島夜雨 華岡晚鐘

日下大龍寺

忠臣日下部使主　日本紀云　履中天皇の皇子市邊押磐の家に
皇孫弘計　ふ　丹後國与謝郡ふ逃遁る其子吾田老と倶ふ
弘計を立て危難を避　又播州編見山の岩窟ふ潛居
書育して使主に養ふ　やがて壮年に及ぶ　使主ひそかに
逃走る　奪走るの意なり　ともに逐ふ後も死も二人の王孫
甚哀しみ　海浜に徘徊　吾田老ひとり父乃志賀
絶く赤石の海　魚ふ漁も其時　清寧天皇治路治人治猶の
日の浜　魚　みな　二人の皇孫　ひとふ嫌はせぬひと文中へ
仁賢　陽皇　天皇　と　我　中　ひる其　舎人　弟　佐ふ郎しめ
中ひる是みな日下部父子の忠貞あり　宗　天皇　こ　ぎ　獅り

河内名所圖會卷之五終

らんかく
法月圓檢

懷花
校元